

「脳神経科学とポジティブ心理学」研究会趣旨

稲垣久和

「脳神経科学とポジティブ心理学」(A・1) 研究会で行いたいことは、一言で言うと、皆が幸福になる社会を形成する基礎は何か、ということです。それは脳の働きと関係しているでしょう。脳という生理的物質があって自己意識があるのですが、脳と心の関係について多くの哲学的、科学的、場合によっては宇宙論的、宗教的問いが潜んでいます。

賀川豊彦の『宇宙の目的』(1958 年) という本の英訳が最近出版されました(2014 年 3 月)。

<http://www.cornerstonechristiansupply.com/product.asp?sku=9781625645098>

彼はこの本で物質から人間の意識までを選択的な進化律を展開することによって構成していますが、その中で「志向性」にふれて次のように述べています。

「インマヌエル・カントの時代はニュートン式機械的宇宙時代であって、宇宙に指向性の選択律のあることすら気づかないでいた」(日本語版 294 頁)。「『脳』は自決目的を完遂するための必要なる過程であり、この過程なくして『私』はない。しかし、『私』は目的と目的をつなぐ合成目的であり、かつ単一目的であり、かつ第一目的である。すなわち、『私』は『自決』そのものである。この自決経験の総合が『私』の個性である」(439 頁)。

このような内容の本が 50 年以上もたって英訳されたのは、日本の民衆のベストセラー作家で社会実践家であり、平和運動家の(ノーベル平和賞に 3 回もノミネートされた)人物が、独自の壮大な自然哲学を展開していた事実を世界の人々に知らしめるためでした。あらゆるものが断片化されてしまった今日、もう一度、人間の文明の総体を問う試みをしたいと思う次第です。英訳編集者のトマス・ヘイスティグス博士も Templeton 財団からの助成を受けてこの翻訳作業を行いました。

私たちの研究会はこの「志向性」を中心に脳と心の研究をしたウオルター・J・フリーマン理論、ニューロン集合の脳カオス理論の検証から始めます。それと拙著『実践の公共哲学』(82 頁以下)でも紹介した物理学からの説明「量子場脳理論」との関係はどこにあるのか(脳波の解釈はどうか?)。他方で、イギリスの理論物理学者で神学者のジョン・ポーキングホーンは『科学時代の知と信』(岩波書店、1999 年)の中で複雑系の科学的存在論的解釈を独自の仕方で行っています。カオスのストレンジ・アトラクターの通る軌道がすべて同じエネルギーに対応しているために、エネルギーの出し入れなしに、「そのエネルギーの中身は、何が起ころうとも影響を受けないのである。位相空間を通る軌道が異なることによって違ってくるものは、それが示している活動的な発展の中で展開していく形式である」。そして、ここでその形式を支配しているのはまさにある種の「情報」(＝意味)です。この情報(＝意味)の出し入れはエネルギーの出し入れなしに継続します。これはカオス理論の際立った特徴です(85 頁)。

意識とは脳の大域的アトラクターであるとの解釈は、これらと整合性を持っているでしょうか? 興味は尽きません。活発な議論がなされることを期待いたします。